

二木長嘯の収集品

尾 関 章

An essay on the collection of an archaeologist

—Niki Chôshô—

Akira OZEKI

1. はじめに

縄文晩期の飛驒人は、憑^つかれたように石に執着していた。彼らが刻み磨いた石は、「石器」という実用的な言辞を遙^{はるか}にこえてしまっている。長く続いたひとつの文化が終末を迎える時、旧来の文化を支えてきたひとつの精神が一気に瓦解^{がかい}するか、最後の情念をもって激しく燃焼するかのどちらかだとすれば、飛驒人の心は後者にこそふさわしかった。事實は、もっと緩慢に推移したのであろうが。

画人岡本太郎は、爛熟した江戸町人文化を、原日本としての縄文のルネサンスとして把^{とら}えた。その当否は別として、江戸時代の飛驒に、飛驒縄文人の心を再生させていた男達がいた。太古の飛驒人の心を、彼らの作品を収集し、見詰め続けることによって己れの心とした男達。ともに飛驒高山の旦那衆の子として生まれ、文雅の道に通じた愛石家、津野滄州と二木長嘯の二人である。詩文・和歌・俳諧に長じ、高山町人文化を高揚させた津野滄州は、当時「石の長者」として著名であった近江の木内石亭と深く交遊し、数多くの化石や石器類を収集すると同時に、その目録を『雲漢輝彩』と題し稿している。長嘯は滄州の後輩にあたり、当時盛んであった「心学」を己れのものとすると同時に、愛石家としての滄州の後を継ぎ、特に神代石（石器類）の収集と記録に特異な業績を残すこととなる。この時代の飛驒高山には、彼らの他にも多くの文人が輩出し、また同時代は、高山旦那衆の豊かな経済力を背景に、豪華絢爛たる高山祭の屋台が生み出された時代であった。古代の「飛驒の匠^{たくみ}」の技の華麗なルネサンスと同時に、地味ではあったが、原始の飛驒人の心もまた、彼らの心の裡^{うち}に静かに再生されていたのであった。

滄州と長嘯を本格的に世に問うたのは長谷部言人である¹⁾。その後、大野政雄は長嘯の生涯と業績を詳細に研究し、その成果をまとめ発表した²⁾。長嘯の多くは、同氏の研究によって明らかにされた

といえよう。また、その収集品については、二木家のご厚意により、昭和60年度春季に当館が開催した特別展「濃飛の縄文時代」に総計92点を公開することができた。この報告書は、これらの成果をまとめ、長嘯の収集品の一部を図録として改めて紹介しようとするものである。なお、この報告書作成にあたっては、二木家をはじめとして、多くの方々のご指導とご協力を得た。深く感謝の意を表したい。

2. 長嘯の生涯と江戸時代の実証主義

長嘯の生涯については、大野政雄の精

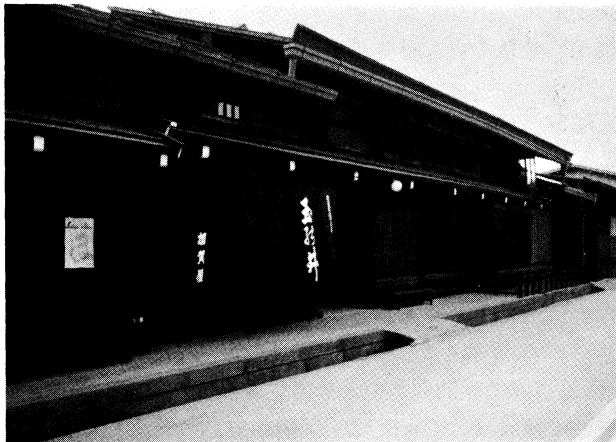


写真1 二木家（玉の井醸造元 高山市上二之町）

力的な調査³⁾によって明らかにされている。以下にその概略を示したい。

1755（宝暦5）年 二木家6代安純の長男として生を受く。幼名を孫三郎、名を俊恭、字は子敬、後に酒造業玉の井7代目長衛門を嗣ぐ。文雅、心学の道に通じ、長嘯と号した⁴⁾。
1771（明和8）年 同郷の漢学者赤田臥牛に伴われ、上京。近江の木内石亭宅に一泊。「石の長者」石亭とめぐりあう。時に長嘯17歳、石亭48歳であった。
1786（天明6）年 『家訓⁵⁾』を記す。
1787（天明7）年 石亭宅再訪。『南遊記』『雑記』を記す。
1788（天明8）年 石亭の『雲根志』を模した『雲根図⁶⁾』を描く。この年より石亭との文通が始まり、以後1801年まで続く。現在二木家にある書簡は、長嘯書簡に付札などが付されて返送されたものも含め52通ある。『家訓⁵⁾』を記す。
1790（寛政2）年 奇石・神代石探訪のため、関西方面を旅行。大和普賢院では所蔵の神代石20品の図を写す（『諸家珍藏神代石図』に所

収）。この旅行中、長嘯は自筆の『神代石図⁷⁾』を携行していたことが、『南遊記』にみえる。
1791（寛政3）年 石亭宅訪問。石山密蔵院の石を石亭とともに見学。また石亭所蔵の神代石30品を写生（『諸家珍藏神代石図』に所収）。
1792（寛政4）年 神代石の製作、用途をめぐり、書簡で石亭とはげしく論争する。
1799（寛政11）年 石亭より『神代石図巻』の序文が届けられる。小冊子『神代石之図⁸⁾』に、赤田臥牛が序文を記す。
1801（享和1）年 石亭宅訪問、石亭像を描く。
1808（文化5）年 石亭死す、享年85。この年長嘯は高山の豪商^{とくさ}らと協力し、木賊新道（久々野町）を修築⁹⁾。『遊紫霄巖記¹⁰⁾』を著す。
1812～13（文化9～10）年 心学講話の要項を『講席日誌』に記す。なお、文化9年には、飛騨郡代が京都の著名な心学者脇坂義堂を招き、心学の講話を民衆に聴かせている。
1814（文化11）年 6月10日長嘯死す、享年60。法号宗俊 照蓮院北岡に葬られる。

江戸時代は、実証的な学問が最も精緻に発達した時代といわれている。この時代に本格的な思想として導入された朱子学は、「格物致知」、すなわち「物の理」を究める実証的な合理主義精神を発展させる原動力となった。その証左として、たとえば朱子学の系譜から出た本草学や農学研究の多様な開花をあげれば、十分であろう。前代までの文化を支配していた仏教の彼岸性は、朱子学の現実性にとってかわられ、人々の眼はこの俗世（浮世）を埋めつくす多様な個物へと向けられていった。また、朱子の理念に囚われることなく、孔孟荀子の言辞に即することをその学問的方法とした古学や、儒仏の先入観を排して、日本の古典に即し、日本古代のありのままの姿を呼吸しようとした国学の意志は、朱子学の方法とは別の意味で、江戸実証主義の究極の姿であったといってもよいであろう。ところで、朱子学の方法を歴史解釈の分野に最も厳格に適用した学者は、新井白石である。白石は、「神とは人なり」の言葉で著名な『古史通』の方法を、「凡上古の事を記せしものをみるには、其記せし所の文字に拘はらずして其義を語言の間に求むべし」とした。『古史通』の各所に読むことができるその実証的、合理主義的見解は、近代史学の先駆であったといっても過言ではない。また、既にふれた本草学や農学の著しい発展や、『大日本史』編纂のための全国的な史料採訪などの諸例は、近代博物学の基礎が江戸時代に早くも確立されていたことを示している。そうした状況は、たとえば江戸時代の日本を訪れたフォン・シーボルトの日本人に対する驚嘆や、明治10年代にエドワード・モースをして「日本ほど考古学に関心をもつ人が多い国は世界中ほかにない」といわしめた状況に示されている。いや、「近代博物学の基礎」という言葉は妥当でないかもしれない。別の言葉でいえば、「町人学者を中心とした庶民の博物学的関心」というものであろうか。とまれ、そのような空気が、徳川二百数十年の間に静かに醸成されていたことは確かであった。石亭や長嘯は、そうした時代に生まれべくして生まれた個性的な人物であったといえるだろう。

長嘯は、神代石のうち、曲玉・管玉・雷斧の他は「思いつき次第めったやたらに形にこしらえ、神社に奉納したもの」と考えた。これに対し、石亭は次のように反論する。「それぞれに形もありて遣い方用法もあり、入用の物被存候。併只今の人の心にて、只今の遣い方用法により考申候は違可申候。存の外成る事共に可有之候」。しかし、長嘯は一步も譲らなかった。「何もかも一物一石辻も遣い方の有べきものとのみも、余りにこりたる見識ならんか。外の事は不知、神代石は其心々によりて、道具の形ちを学たるも有、又其石に思いついての形ちも有と見え申候¹¹⁾」。近代的な常識からいえば、石亭に分があるようにみえる。しかし、長嘯は神代石の全てを実用の具としてみようとする石亭の「合理性」にあくまで反発する。ところで、石亭の合理主義が目新しいものではなく、既に語られてきた朱子学的常識からきているとすれば、彼もまた朱子学という「制度としての言語」で語っていたことになる。長嘯もまた然りであった。たとえば、長嘯が書き記した『家訓』はいくまでもなく、多少なりとも自由な感覚で書かれた『遊紫霄巖記』においても、長嘯自らが頭書に「是より末二枚、比書の眼目ナリ」と記した「真人の宣言」部分こそが、「心学」という制度としての言葉を借りて書かれた最も退屈な部分であったことは否定できない。

理屈を度外視した「思いつき次第めったやたらに形」という長嘯の言葉は、決して上品なものではない。しかし、その言葉の背後には、それまでの制度としての言葉では決して表現できえなかった長嘯の神代石に対する心情が隠されていたといえるだろう。私はここで、後世「御物石器」とか「石冠」と名付けられる、いわゆる信仰石器類を、石亭のように全て実用の具としては見なかった長嘯の先見性、石亭に対する優位性を云々しようとするものではない。石亭は「入用」という言葉の中に「祭器」の概念を入れていたかもしれないし、長嘯の「其心々によりて」という言葉には、分類的な概念が欠落している。博物学的な常識は、全国の奇石を通覧していた「石の長者」の方が勝っていたことは言うまでもないことである。

長嘯は、手近にある神代石を、あえて分類するようなことはせず、それを見つめ、そのありのままの姿を紙に写した。他人の眼からすればガラクタ同然の石塊を限りなく愛惜し、その石を作った人々の心に即そうとした長嘯。「外の事は不知、神代石は其心々によりて（中略）有と見え申候」

大野政雄は、論文『木内石亭と二木長嘯¹²⁾』のなかで、次のように述べている。

「執拗で熱心な石亭の要望に対して長嘯が調達し、また贈与した石器類は、書簡の示すかぎり、次のように極めて微々たるものであった。神代石（寛政五）、雷斧五代百疋・鏃十二代老両八分・鏃十五（同六）、雷斧・鏃十八（同九）、鏃十二・飯匕・雷斧欠（同十一）、雷斧二（同十二）、雷斧欠（享和元）この程度では、おそらく石亭の渴望をいやすことはできなかったであろうが、それだけにまた、長嘯の神代石への愛惜がいかに深いものであったかを物語っている。」

太古の飛驒人の心は、言葉では決して表現できない形をもって、長嘯の裡に再生していたはずである。

3. 長嘯の収集品

「天巧にあらず、人作にあらず、其形容一ならず。何たる物知る人なし。是を神代石と称して、弄石家之珍藏尤甚し。」これは石亭が長嘯に送った『神代石図巻』序文の冒頭である。当時、石器類や古墳から出土した石製品の一部は「神代石」と総称されていた。また石器類は、「雷斧」とか「雷鉞」という言葉で分類されていた。雷雨の後、表土にその姿を現わす場合が多いためか、雷神が石器を降らすという考え方は中国、ギリシア、ラテン、ドイツなどの石器に対する各言語に共通するものだという¹³⁾。二木家に所蔵されてきた石器を一覧で示せば次表のようである。

石器は本来、実用的な道具として生み出された。しかし、人間個有のフェティシズムは、それらを装飾品や儀器、信仰の対象などにも化していった。二木家所蔵石器（ここで長嘯収集品としないのは、後に加えられたものも考えられるからである。以下、所蔵品と略す）のうち、そうした石器につい

二木家所蔵石器等一覧

	名 称	(江戸時代)	員数	時 代	備 考
1	石 斧	雷 斧	57	縄文～弥生	(内), 完形44, 打製1,
2	多 頭 石 斧		4	縄 文	(内), 六頭1, 三頭2, 不明1,
3	環 状 石 斧		1	縄文～弥生	
4	石 棒	雷 鎚	(13)	縄 文	(内), 完形の両頭石棒2,
5	石 剣	雷 剣	(9)	縄 文	
6	石 刀	雷 刀	(3)	縄文～弥生	
7	石 冠		17	縄 文	(内), 球頭状7, 斧状9, 石鋸型1,
8	石 冠		1	縄 文	おいねずみ型石冠
9	石 砧		1	縄 文	
10	独 鈎 石		2	縄 文	(内), 完形1,
11	御 物 石 器		3	縄 文	(内), 濃飛型無文2, 北陸型無文1,
12	猪 首 形 石 槌		1	縄 文	完形
13	石 錘		3	縄文～弥生	
14	その他・不明など		13	不 明	後世の加工品と思われるものが多い

員数()のものは相互の移動があり得る。

〈ケースに入れられたもの〉

ケース仮No.	時 代	名 称
1	縄 文 ～ 古 墳	硬玉製大珠1, 有舌尖頭器1, 首飾り(玉)1, 金環5
2	〃	首飾り3, 玦状耳飾り1, 車輪石(模造品)1, 垂飾品など
3	縄 文	有舌尖頭器4, 石錐4, 石匙4, 他に石鏃など総計22
4	〃	石錘3, 垂飾品1, 不明5
5	縄 文 ～ 弥 生	玦状耳飾り2, 垂飾品9, 勾玉3, 管玉2など総計23
6	縄 文	石鏃, 尖頭器等総計28
7	縄 文 ～ 古 墳	勾玉16, 管玉17, 垂飾品等総計39

(他に、いわゆる奇石等の所蔵品が2ケースある)

ての短い解説を付しておきたい¹⁴⁾。なお、所蔵品には江戸期の加工品も混入していると思われる。

〈磨製石斧〉縄文時代に入ると、小型の美しい磨製石斧(2～5cm)がみられるようになる。これを実用をこえた儀器または装飾品とみる考えがある。所蔵品の中にも数点みられる。特殊な石斧としては多頭石斧や環状石斧があるが、特に所蔵品の環状石斧(写真10)の穴は、棍棒を通すにはあまりにも小さく、石斧としての実用性は失われている。磨石に後世穿孔された加工品とみる方が妥当かもしれない。

〈石冠〉総出土数の8割が中部圏に集中し、なかでも飛騨を中心とする県内からは総数の約2割が出土している。縄文後・晩期の飛騨地方を代表する石器のひとつである。所蔵品のなかでも、量質ともに目をひくものとなっている(写真20～32)。型式は多いが、飛騨出土の6割以上は球頭状石冠(写真20～28)と斧状石冠(写真29)で占められている。前者は、明らかに男根を形象しており、この用途については様々な考えが示されてきた。なかでも、赤木清(江馬修)の処女性破瓜の道具から呪術石器へと転化したとする説は特異である。

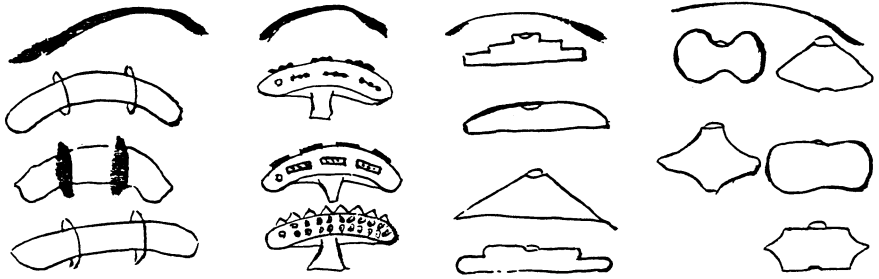
〈御物石器〉所蔵品には3点あるのみだが(写真19)、総出土数の半数が飛騨に集中しており、文字

どおり、縄文晩期の飛驒を代表する石器である。大型で重く、集落址から1点出土する例が多いことから、集落共有の祭器として安置され、信仰の対象とされていたと考えられている。

〈石棒〉縄文中期以降、東日本を中心に広く分布する。1mをこえる巨大なものから、30cm以下の小さなものまで多様である。時期が下るにつれて小型化し、また出土地も屋外から屋内へと変化していったと考えられている。久々野町の堂之上遺跡では、石囲炉の隅に立てられた大型石棒が発見されている。また円棒は後に扁平化し、縄文後晩期にはその変形としての石剣（二側面に鈍い刃が付く）、石刀（一側面に刃が付き反りが加わる場合が多い）が多く出現するようになる。石棒の頭部は、明らかに亀頭を形象化したものと思われるものが多く、また女性器を強調した土偶と同様にその多くは破損した状態で出土する場合が多いことから、土偶とはペアの関係にあった呪術石器とも考えられている。民俗事例として、畑に石棒を立て、地母神の依り代とする風習が残されていることから、狩猟や植物採集の多産を祈る呪術石器であったとも考えられる。所蔵品には、完形の両頭石棒が2点あるが（写真33・40）、写真33にみられる精巧な造りからは、破壊された石棒が有する強烈な呪術的エネルギーは伝わってこない。呪術（動）から信仰（静）への移行を物語っているのだろうか。

〈独鈷石〉飛驒地方からは全国出土総数の1割（60点）が出土している。当初は石斧の機能を有していたものが、後に儀器的なものに変化したものとする考えがある（写真15・17）

〈その他の異形石器〉長嘯が『神代石図』の最初に掲げた石器（写真46）は、東北～北海道地方にかけて多く出土する青竜刀形石器に似るが、丸味をもち、厚さもあるので、石砧とみるべき石器である。また、猪に似た頭をもつ猪首形石槌（写真48）は、石棒の一変種であり、猪の他に鮭の頭を模したものなども出土例としてある。おいねずみ（写真50）と呼ばれる異形石器に対しては、石棒の変種と考える説と石冠の一型式とする考えがあるが、後者が有力である。



（68頁の続き）

形ソロバン粒ノ如ク中ニ一穴貫平タク丸シ、此類多クハ色黒シ大サ径三寸或ハ四、五寸
諸方ニテ是迄見申候所十余も見申候、大同小異全同物ト相見ヘ申候

此類アリ、大サツム□帯ノ如クウス平ニテ中ニ一穴アリ、径リ一寸四、五分厚サ中ニテ漸四五分

此類鼠色ニテ一方ニ一穴アリ、形状種々様々ナルモヤウ彫上甚六ヶ敷細工也、大ナルハ六七寸、小ナルハ二寸位、今好事家ニ石鈎頭□拙老も二ツ所持、諸方弄石家ニ一ツツム所持也、然ニ越後ニ五十所蔵ノ人アリ、図来り候

此類ノ物アリ、容イロノサマノにして其根元同物也、大ナルハ尺小ナルハ二寸、拙老も二ツ持申候、信州ニ三、四品持居候人アリ

是等より御考可被成心ニウカミ次第ノ作とも見ヘ不申候、石鈎頭杯ハ甚六ヶ敷細工ニ御座候

正月廿三日

石亭（花押）

長嘯亭様

〈資料〉木内石亭の手紙

江州木内小繁狀 申（天明八）五月十七日達

四月廿一日御日附之貴報五月十一日相達忝拜見以先第二向暑大家益御安剛之旨奉賀候、小子無異変乍慮外御安情可被下候、扱此辺ハ京師大變後世上万端騒々敷不風流成事大已ニ御座候

一奇石之儀御穿鑿被成候へ共愚民不吞込之段御尤存候、何方ニ而も左様之物ニ御座候併御心永ク御世話被成候へハ其内ニハ自然ト吞込好キも巧者人も出来ルものニ御座候

一鐘乳之形狀御尋承知致候 指ノ太サにて長サ一尺或ハ三五寸數本一株トナリ

氷桂のごとき物ニ而白色皆剛長短何本も垂レ下リ尤細ク長キ物上品弄石之最上ニ候至テ上品成ルハ透徹物も稀ニ有之候、硫黄之塊のごとき物ハ甚之下品也

一トクコ山 万物化石御見当リ無之由候儘ニ承リ申候谷川杯御尋ニて随分可有之也○玻璃萩原なるべし道法方角ハ聞達欵○上松洗馬信州地名之由此方扣消シ可申候○アダノ塩ゾウの化石ハ大石之儀成程先達而滄洲子よりも承り図も貰申候、其内ニ而之小キ物一ツほしき物也

一石卵 是ハ石卵ニ而ハ無御座候、石卵ハ石中之卵石別種之物ニ而鉄丸ノことく至テまん丸也、尤大小ハアレとも卵ノ石質とんと常石ト違イ申候、此度御見せ被申下候物ハ卵ト云物常ノ石也、押テ漢名ヲ付候て硨磲石共可申物か、硨磲石ハ常ノ小石ヲ土砂ニテ巻キツムミ塊テ共ニ石ト成り年々ニ増長スルト有之候併此石ハ増長ハセニイなれ共一水精砂上品ノ沢山ニ御恵投千万大慶仕候、如仰先年滄州老より少斗もらい爾今弄玩仕候

一珀石珍物忝奉存候、是も先年老人より少斗貰イ所藏致候、是雲膽ナルベシ郡村名地名御聞糺可被下候

一角川村之中小侯井谷及二屋村ノ蛇岩之流甚面白キ事雲根志続編ニ出シ可申大慶仕候外ニ奇談も御座候得は御聞糺奉希候

一小島村ニ而黒嶽藤七穿出シ申候、一ツ巴ノ形之物扱々ノ珍翫

是ハ其行衛御吟味ハ相成り不申事か究テ大曲玉ナルベシ何卒行先キ御穿鑿專要御座候国郡村名山名年歴御書記奉希候、是ハ至テほしきもの也○小ニテモ曲玉類甚望ニ御座候、若所持之人有之価ニテ手ニ入るも御座候ハハ御世話偏ニ願上候

一御珍藏文石之図忝扱々奇物驚入申候、他家珍藏之図巻へ加へ不洩大慶仕候、扱此石又々出テ申候ハ小サクテモ下品ニ而も不苦候間御世話奉希候、御心掛被下候

一木葉石何方ノ産ニ而も柔和ニ而下なるものニ御座候、是も種類ニ御座候へハ望ニ御座候所々ニ御座候ハハ一石ツム拳斗成候ヲ御恵ミ頼上候、木葉石も異形之葉形候へハまづ珍敷其所ニ而も剛柔有之物ニ御座候、随分剛キ珍御世話奉希候

一木実石随分望ニ御座候、御手ニ入安ク候ハハ後便御恵ミ頼上候一雷斧稀ニハ出候よし御心掛ニ而御手ニ入候様奉存候、種々ノ形有之物ニ御座候、曲玉雷斧管玉鏤石杯ノ類ハ上古之神製物弄石ノ最上面白キものニ御座候

一鏤石 孔子家譜ニ御見当リ被成候、御書写し被下御厚情不洩忝存候

○雲根志中ニ肅慎国ノ人雁ヲイル説直海氏説所ト御書被成候、直屬氏ニ而ハ之無松岡氏也

鏤石肅慎国雁ヲイル家譜ノ説勿論ニテ御座候

○本草綱目ニモ出申候

石簪出ニ肅慎国一人以ニ枯木ニ為レ矢青石為レ鏤施レ毒中レ人即死

○雲林石譜ニモ

獲古箭鏤其実則石長三、四寸許此孔子所謂措矢石簪肅慎氏之物也

一如仰台ニ饒候石ハ一八難得御座候、夫故一段面白被存候右之通ニ而此間之御答相済申候

五月十四日

木内小繁

重暁（花押）

二木長兵衛様

御再趣座へ

一御頼ミ申上度儀御座候ハ下拙所蔵之石ノ内ニ而何石成共一ツ国ニ御認メ可被下奉希候、屏風ニ張り申候由ニ而備前岡山より望ミ被越申候、右之義偏ニ頼上候、貴公御存之内何石ニ而も不苦候、尤大ナル物可然坎と察申上候、紙寸法ハ一尺四方位坎一尺ニ横ハ耆尺四、五寸ニ而も可然唐紙四ツ切位可宜と被存候○山始掘飯○海拂子○石桂芝○琉球珊瑚○自然銅○石卵○海鉄炮杯之類可然哉いづれにも答次第大形ニ御認偏ニ奉希候

次第ニ暑ニ趣候ヘハ随分御自愛御暮專一御座候、京都大變跡も御覽旁少々御上京奉御座候、京師へも御同道可仕候旦滄洲御老人へ可申上条相止候謹言

長嘯亭大人 玉机下

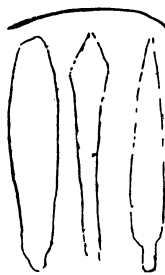
島礫道人（花押）

（寛政四年）正月廿三日 二月廿八日達 返書状

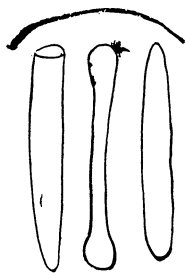
如此認緘し京便り待申所へ去ル十二月十八日御日附ノ貴書相達忝拝見、右御報

一自然銅之御考御尤存候、仰之通拙老所蔵之自然銅（マコ）ハ少シ違イ可申哉、志かし重ね箱ニ入置候小ノ方ニ而御考可被成候、拵物ニ而ハ無之候、白キ所離レ申所ハ心安クはなれ申候、不離所ハ鉄槌ニ而打候共外ハ破テモ白キ所ハイツカナ碎不申候、謹テ考申所漢産之自然銅ヲ三ツ四ツ継候物かと察申候、賈物とハ見ヘ不申、併近年之舶来ニテハ無之候

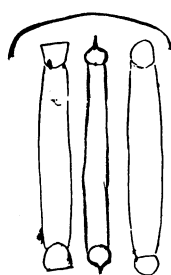
一神代石異品御見当り之由にて図御見セ忝驚入申候、雅物ニ候、曲玉管石雷斧之外ハ思イ付次第メッタヤタラノ形との御考面白ハ候へとも拙老ハいま初一念解不申候、それ〳〵ニ形もアリテ遣イ方用方もアリ入用之物と被存候、併只今ノ人之心ニ而只今之遣イ方用法ニヨリ考申候ハ違可申候、存之外成ル事業共ニ可有之候、メッタヤタラニ而ハないと申証ニハ



石質色品々アリテ先キ尖スルドク平ミアリテ鎗ノ身ノ如シ、此類ニ磨肌ト欠キ肌ノ二種アリ南海ニテ鯨ヲ取ルニ稀ニ鯨ノ背ニ一本二本立テアリ、尺已上ハ稀世、五寸已下ヲ礫石ト云



質色石ニ同、長サ尺余、マンマル摺粉木のことし、此類も大同小異ニ而所蔵之人多シ



石質石色品々アリ形も少シ違テ大体同容ノ物□□数々見申候、少シ長短アレトモ多ク此類長サ一尺六、七寸全キ物稀世、折レ多シ

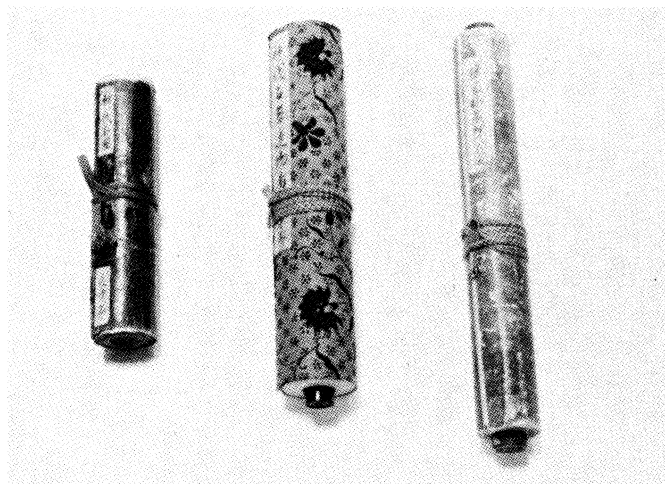


写真2 神代石図・神代石器遺物図・諸家珍藏神代石図

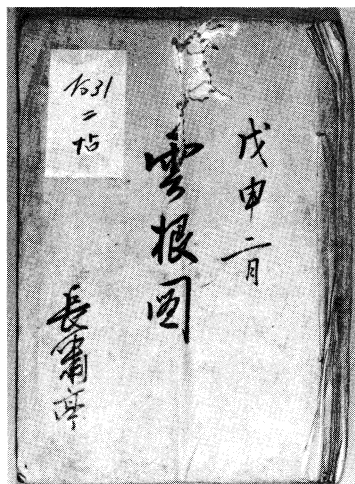


写真3 雲根図(戊申2月,天明8年か)

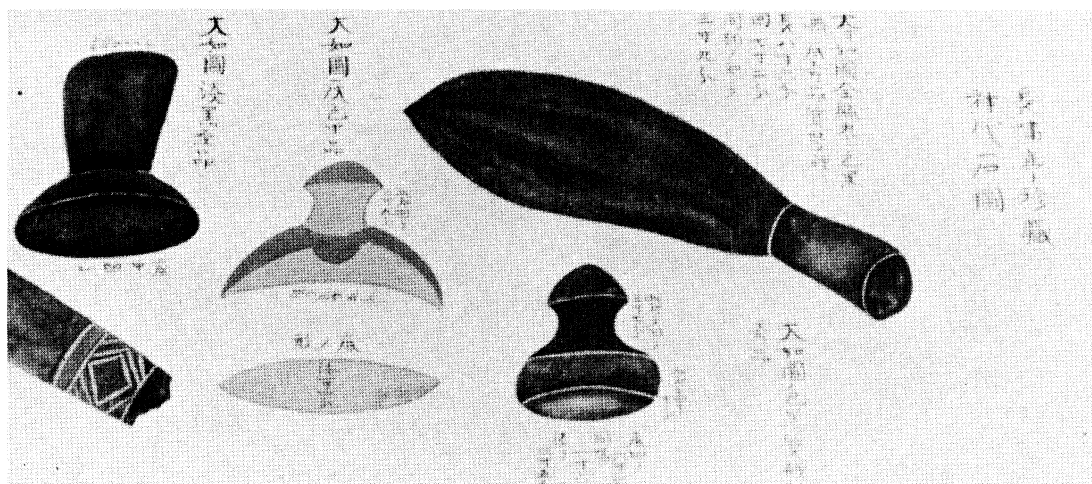


写真4 神代石図部分

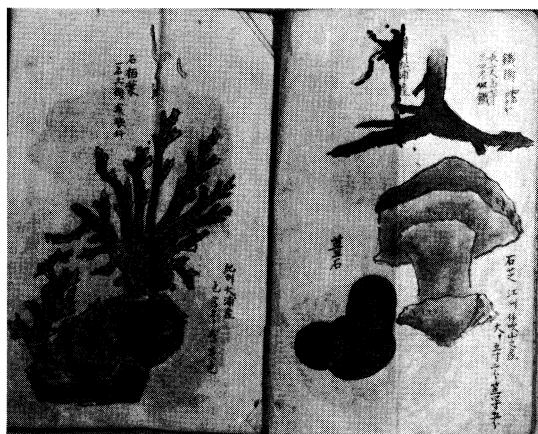


写真5 雲根図部分



写真6 (同左)



写真7 神代石図巻序（木内石亭 寛政11年）

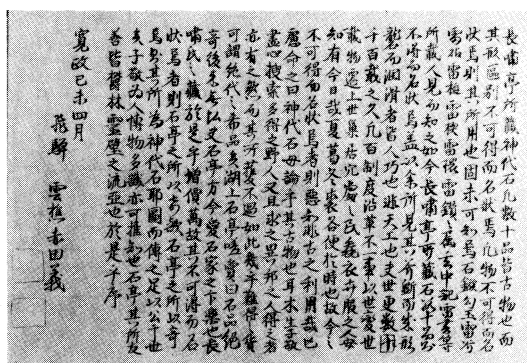


写真8 神代石之図序（赤田臥牛 寛政11年）

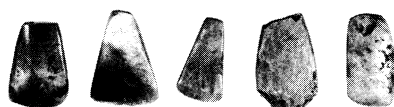
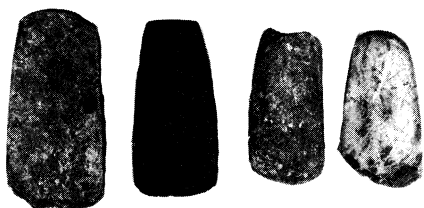
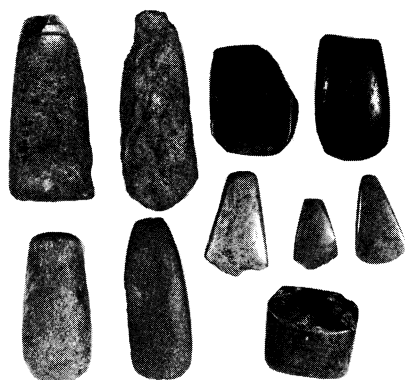
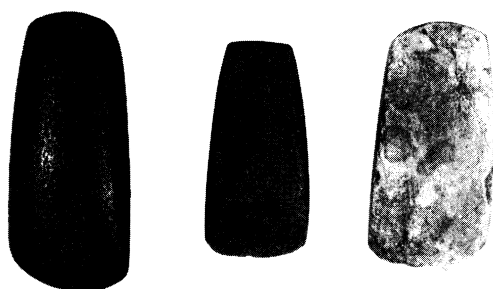


写真9 磨製石斧

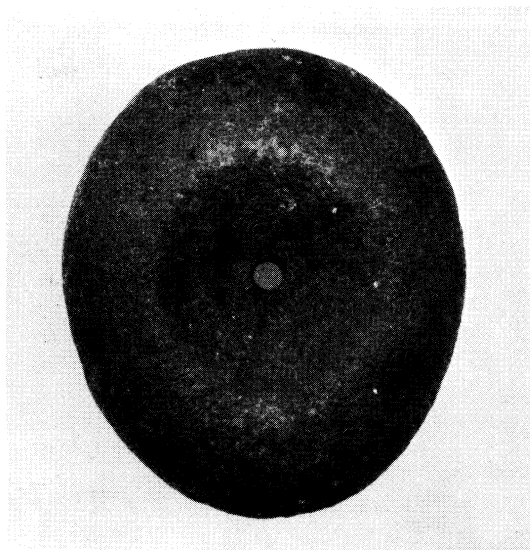


写真10 磨石または環状石斧

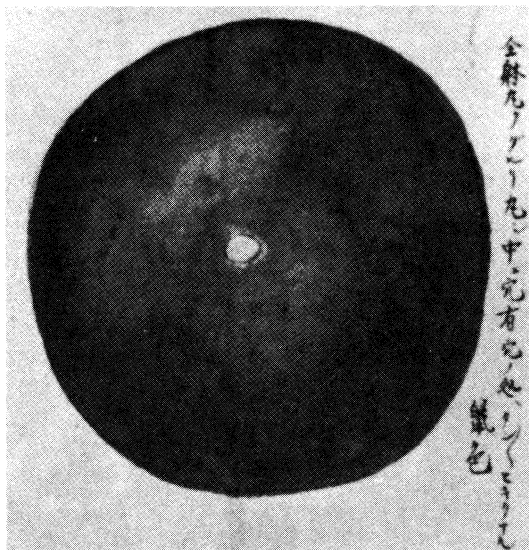


写真11 (同左) 長嘯図

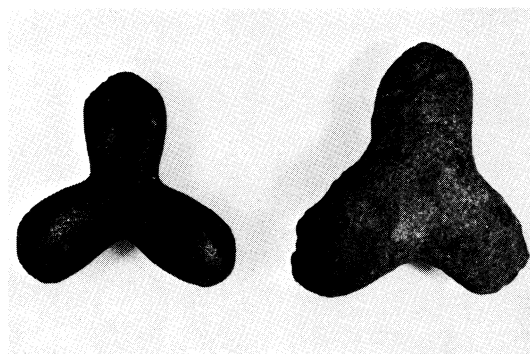


写真12 多頭石斧

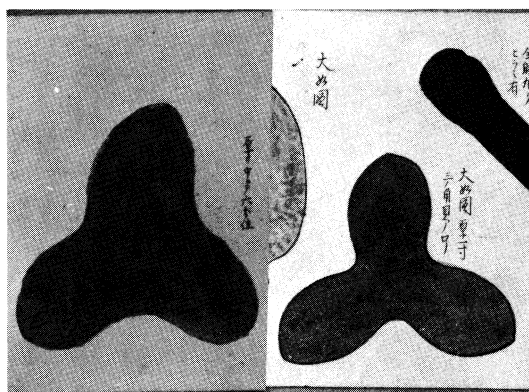


写真13 (同左) 長嘯図

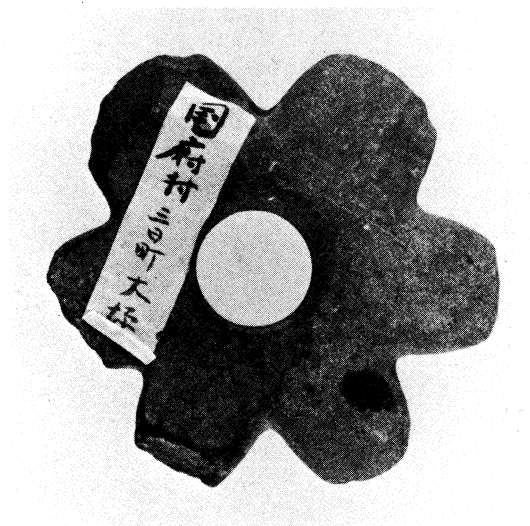


写真14 多頭石斧



写真15 独鉦石



写真16 (同上) 長嘯図



写真17 独鉦石

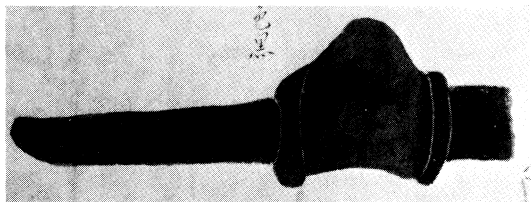


写真18 (同左) 長嘯図

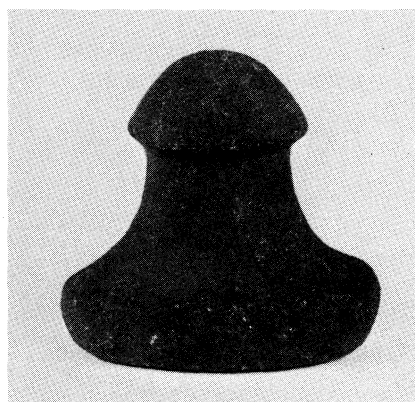
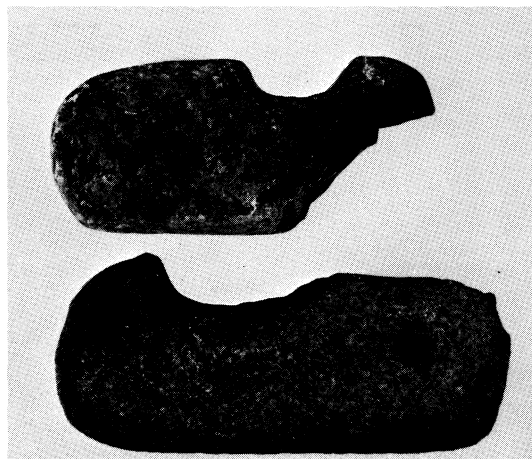


写真20 石冠

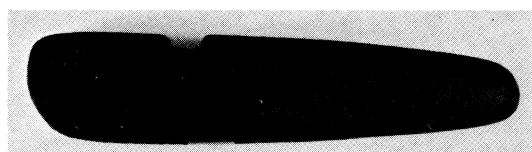


写真19 御物石器



写真21 石冠



写真22 (同左) 長嘯画

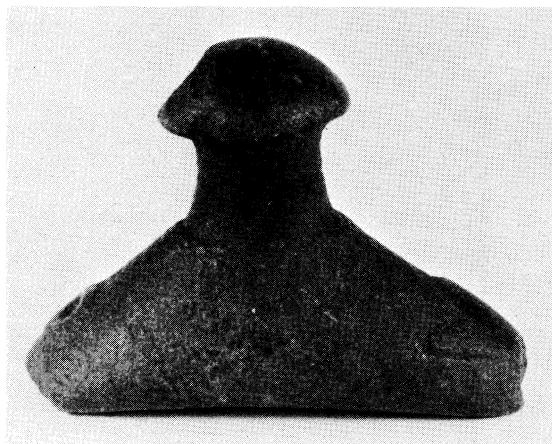


写真23 石冠



写真24 (同左) 長嘯画



写真25 石冠

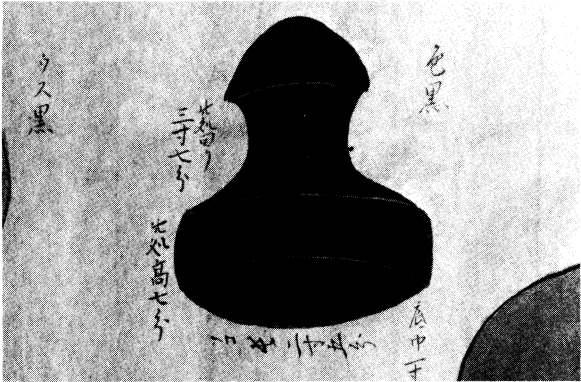


写真26 (同左) 長嘯画



写真27 石冠

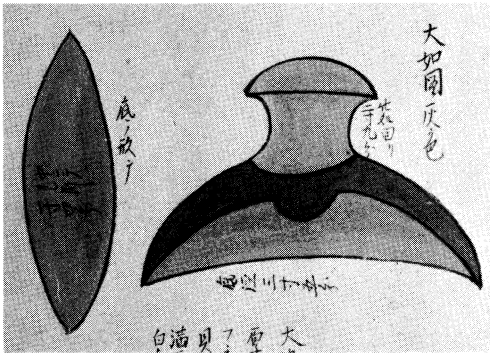


写真28 (同左) 長嘯画



写真29 石冠

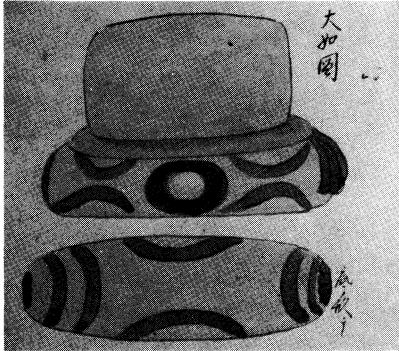


写真30 (同左) 長嘯画



写真31 石冠

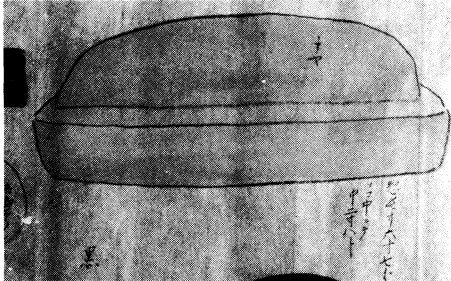


写真32 (同左) 長嘯画

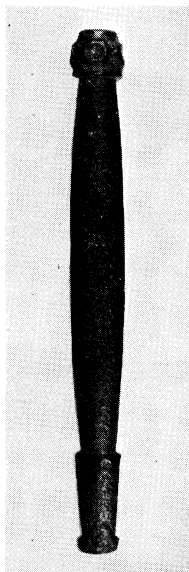


写真33 石棒

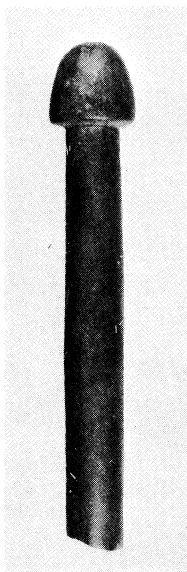


写真34 石棒



写真35 (同左)
長嘯画



写真36 石棒

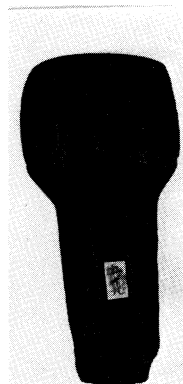


写真37 石棒

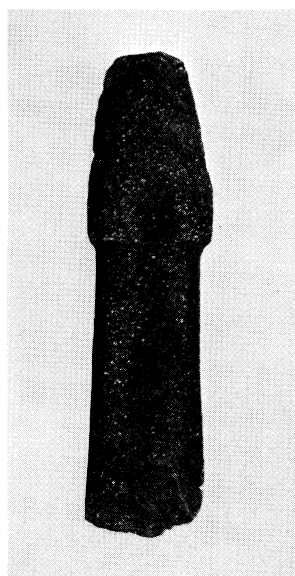


写真42 石棒



写真38 石棒

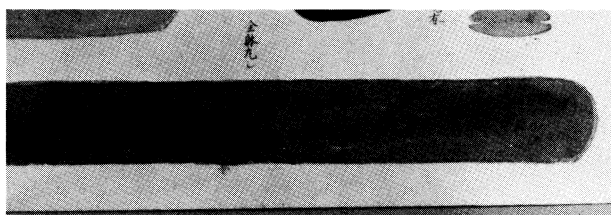


写真39 (同上) 長嘯画部分



写真40 石棒

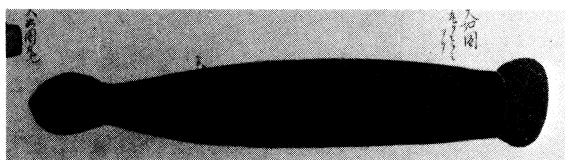


写真41 (同上) 長嘯画

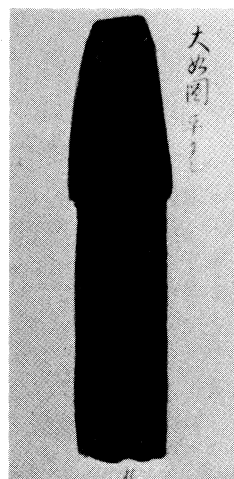


写真43 (同上) 長嘯画



写真44 石剣

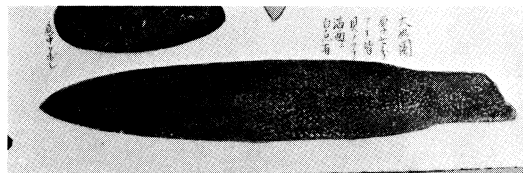


写真45 (同上) 長嘯画



写真46 石砧



写真47 (同上) 長嘯画



写真50 石冠(おいねずみ)

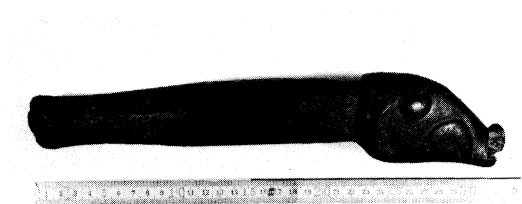


写真48 猪首形石槌(上下同一品)

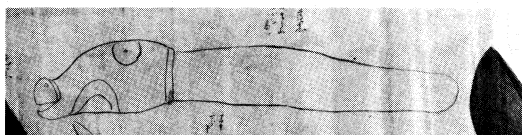


写真49 (同上) 長嘯画

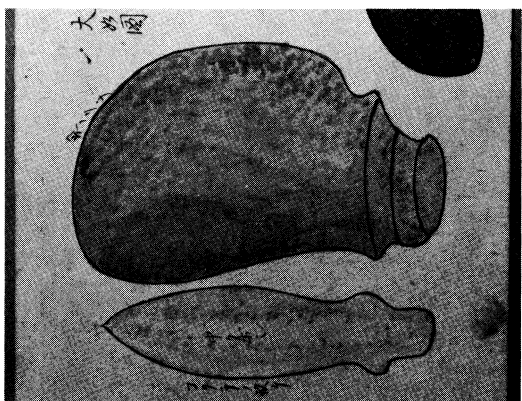
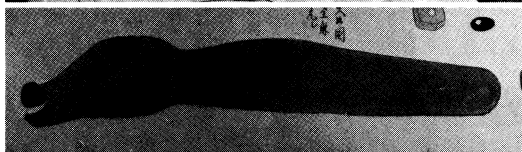


写真51 (同左) 長嘯画

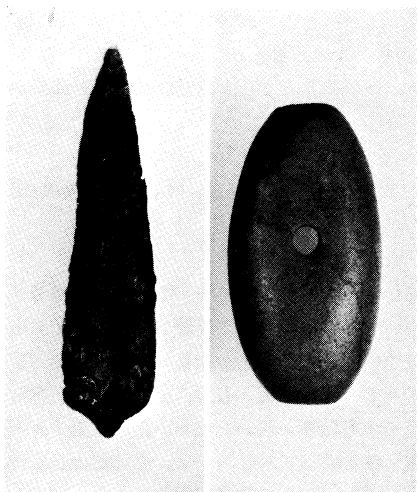


写真52 有舌尖頭器・硬玉大珠

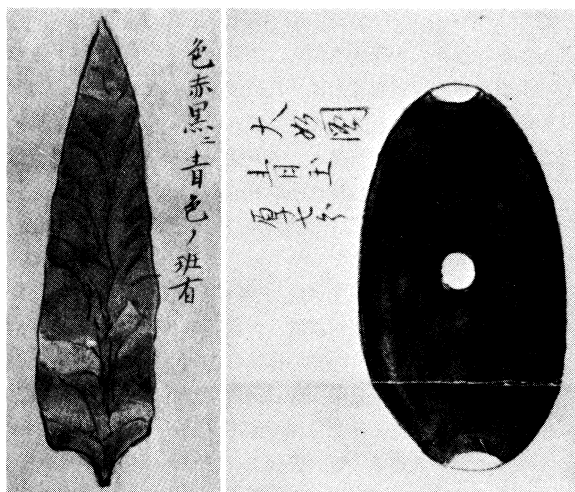


写真53 (同左) 長嘯画

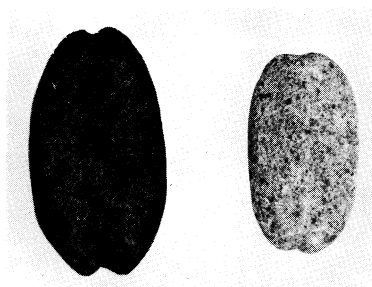


写真54 石錘

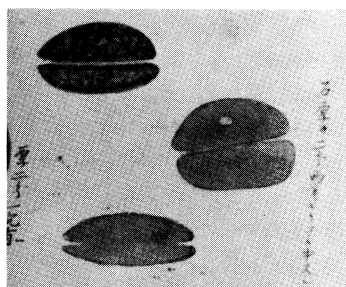


写真55 石錘図長嘯画



写真56 有舌尖頭器・石鏃・石錐など



写真57 勾玉・袈状耳飾りなど



写真58 長嘯画

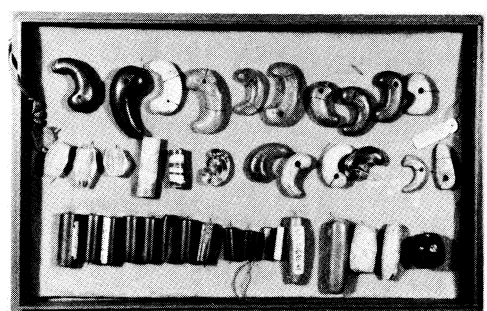


写真59 勾玉・管玉など

註)

1) 長谷部言人「福島滄洲と二木長嘯亭」『ひだびと』8巻3号 昭和15年 1～17頁。

このなかで長谷部言人は「石亭所蔵奇石神代石は既に盡く散逸したが、彼の畏友たりし滄洲及び長嘯亭所蔵品が旧態の儘保存されてゐるのは実に天幸といふべきである」と述べている。

2) 大野政雄「木内石亭と二木長嘯」『飛驒春秋』13巻4号 昭和43年 5～14頁。

同じく「二木長嘯の神代石収集」『考古学の先覚者たち』中央公論社 昭和60年 33～46頁。同じく校「特集・講席日誌・遊紫霄巖記」『飛驒春秋』15巻2号 昭和45年 全頁。

3) 大野政雄前掲書。

4) 二木家所蔵の『系図』は、長嘯の生涯を次のように記している。「家代々酒造ヲ業トス幼ヨリ学ヲ好ミ尾張藩ノ高儒松平君山ニ師事シ業就リテ後心学ニ志シ其熟スルヤ世道人心救済セントシ国内各地ヲ巡遊シテ勤儉興業ヲ唱導セリ、多趣味ニシテ詩ハ赤田臥牛門ニ学ヒテ善クシ絵画ハ十歳ノ時飛驒十景ノ作品アリ加賀ノ千代尼ノ発句賛及江戸ノ俳人雪中庵蓼太跋文ノ画卷現存ス長シテ圓山四條ニ則リ一家ヲナス曾テ飛驒ノ名蹟、藤橋、籠渡、飛虹石ノ三図ヲ皇宮ノ内覧ニ供シ御感ヲ賜リタリ。好ミテ石器ヲ集メ近江ノ木内石亭ト親シク交ハル其也風交アル人ニハ京都ノ大雅堂大阪ノ兼葭堂アリ又瀧澤馬琴ヲモ訪子テ三枝ノ文樹ノ事ヲ談シタルコトアリ。蒐集セル石器玉器及自筆図巻ハ昭和十六年四月九日文部省ヨリ重要美術品トシテ指定セラル、常ニ陰徳ヲ積ムヲ樂トナン窮民ノ藁餌茲米麦等ヲ施与セリ、久々野村大字木賊洞急坂路ノ改修ヲ田中英積、加藤道和ト謀リテ成就セリ、其ノ開鑿碑現地ニアリ、著書ニ詩文集、家訓、新易記、遊紫霄巖記、無借舎新語、福神解、童謡記、畢丸盡或等多シ。」

5) 「家訓」『岐阜県史』史料編近世九 昭和48年 1056～1076頁。

6) 石亭の名著『雲根志』を写したもの。彩色が施され、『雲根志』にない図も加えられている。

7) 『神代石図』を描いた年代は不詳である。

8) 石槍・石斧・石鏃など、『神代石図』にはないものも描かれている。大野政雄は、「長嘯はこのころ『神代石図』の改訂を思いついたのであろう」と推測している（大野政雄前掲書）。

9) 長嘯撰の修道碑と修道の様子を描いた長嘯の絵巻が、現在も久々野町に残されている。

10) 長嘯の心情が吐露されている短編物語。大野政雄前掲書『飛驒春秋』15巻2号に全文掲載されている。

11) 大野政雄前掲書および本報告書「資料木内石亭の手紙（68）」参照。

12) 大野政雄前掲書。

13) 「雷斧」『日本考古学辞典』東京堂出版 昭和37年 561頁。

14) 以下の解説は主に次の各文献を参考にした。

加藤晋平・小林達雄・藤本強（編集）『縄文文化の研究9』雄山閣 1983年。

鈴木道之助『図録 石器の基礎知識III』柏書房 1981年。

高山考古学研究会『飛驒の縄文時代』 1986年。

岐阜県博物館『濃飛の縄文時代』 1985年。

〈追記〉

昭和62年3月28日、文化財保護審議会は「二木長嘯収集石器類」50箇と「神代石図」1巻、「二木長嘯・木内石亭書状」52通を重要文化財に指定する旨、文化庁へ答申した。